

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

王様は王様らしく、騎士は騎士らしくふるまう。身分がはっきりとしていた時代には、その身分にふさわしいかっこうとか、ものの言い方や考え方など、それぞれの身分ごとに、はっきりしたスタイルが決まっていました。その身分にある人自身が、そうしようとしたこともありますし、ほかの人たちから、そうすべきだと期待されていたということもあります。

昔の固定された身分ほどではありませんが、今の社会でも、それぞれの地位によって、どのようにふるまえばいいのかはある程度暗黙のうちに決まっています。どんなことをすべきなのかも、それぞれの地位ごとに、まわりの人たちから期待される内容が違います。このように、^① それぞれの地位には、それにふさわしいと思われているスタイルがある、といえるのです。

これは、たとえていえば、舞台やテレビのドラマで、役者がそれぞれの役を演じているのと似ています。ドラマの俳優のように、その役に与えられたセリフを言い、演技をする。その役に与えられた演技をすることで、ドラマはシンコウします。

もちろん、ドラマとは違って、実際の生活には、台本があるわけでも、つぎに何を言うべきか、セリフが決まっているわけでもありません。とはいえ、ふだんの生活でも、自分の好き勝手にふるまっているわけでもありません。たとえば、ちょっとこわい先生の前では、制服の着こなしをきちんとしてみたりすることがあるでしょう。でも、その先生がいなくなれば、またつめえりの学生服のフックをはずしてみたりする。あるいは、先生の前で話すときと、先生がだれもいなくても仲のよい友だち以外のクラスメートがいるとき（とくに女子であれば、男子がいるときとか、男子であれば女子がいるとき）、それから、先生もいなくて仲のよい友だちだけのときでは、それぞれ話し方も話す話題も違ってくるでしょう。

このように、だれがまわりにいるか、だれに見られているかによって、^② 生徒らしさを調節しながら行動しているところがあるのです。つまり、ドラマのように、ほかの人から期待されたことを、ある程度（もちろん「※アドリブ」も含めて）演じるかのようにふるまっている。そういう部分があるのです。

そう考えると、「生徒である」とは、学校という舞台で「生徒という役」を演じていることだ、と見ることができます。

このような見方をとると、「生徒である」ことが、それほど、あたりまえではなくなってきました。というのも、生徒である状態は、ひとりひとりが生徒という役に□ って、それをこなしているかぎりにおいて成り立つものだ、ということがわかるからです。

別の言い方をすれば、「生徒になる」という段階を通って、あなたも「生徒である」ことができるのです。生徒になるといっても、私立中学の受験をして受かって、ある学校の「生徒になれた」という意味ではありません。生徒という地位にふさわしい、それに見合ったスタイルを身につけ、期待されている役をこなしていく。そういうふうに、だんだんと生徒らしくなっていくプロセスが必要だということです。

今の日本のように、だれもが長い間学校に行くようになった社会では、人は大人になるまでの大部分の時間を学校で過ごします。その間、だれもが「生徒」です。

しかも、生徒という役を演じるのは、学校にいる間だけにかぎりません。学校の外にいても、「生徒である」ことを基準にふるまうようになります。道を歩いても、家においても、買い物に行っても、「中学生の私」がついてまわるのです。

しかも、生徒という地位には、それに特有の役割が与えられています。そして、その役割をうまく演じることを、まわりは期待します。多少アドリブで自分の個性をハツキしたとしても、生徒という枠を越えて勝手なことをしたら、すぐにまわりからブレイキがかけられる。こうやって、幼稚園以来長い時間をかけて、生徒という役にはまっていけるのです。それを、岩見和彦さんという社会学者は、「生徒化」（生徒らしくなっていくということ）と呼んでいます。

③ こうして、子どもたちが生徒化することが、「生徒の世界」の一番もとのところにあるのです。

このような生徒化を経験することによって、自分がまわりからどのように見られているか、どんなふるまいが期待されているのか、といったことについても、「生徒であること」がだんだんと重要になってきます。つまり、学校の生徒としてやるべきことや、生徒だからこそ関係してくることが、自分自身についての見方や評価となってくるのです。

たとえば、テストの点数がいいか悪いかといったハンダンが、自分がどんなふうに見られているかと関係する。生徒という役割には、学校

で勉強することが重要な一部となっています。学校という舞台で、勉強という「演技」をすることが生徒という役には期待されているのです。ですから、その成果が自分の評価の一部となるのも、ある意味では当然といえます。

また、どんな部活に参加しているか、部活では何をしているか（レギュラーか、ホケツか）、部活の成績はどうか、といったことも、生徒であることから生まれる評価の一面です。あるいは、校則を守っているか（まじめかどうか）、先生との関係はどうかといったことも、生徒という役割から生まれる評価です。

問題は、このような生徒であることの評価が、学校の外でも「自分であること」の評価と結びつきやすいことにあります。自分の一つの面にすぎないことが、全体を評価するものとして広がっていく。勉強や部活の成績、校則の守り方といった生徒としての行動が、頭のよさとかスポーツの得意・不得意や特技、さらには性格のまじめさといった、もつと一般的な、学校以外の場所での自分の評価や見方にまで広げられる。そういうことが起こりやすいところに、生徒化されることの特徴があります。つまり、^④どんな生徒であるかが、自分であることの中心を占めるようになるのです。

（荻谷剛彦『学校って何だろう 教育の社会学入門』）

〔語注〕※アドリブ……自由に思いつきでその場の雰囲気に合わせて言うこと。

問一 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ハイユウ b シンコウ c ハッキ d ハンダン e ホケツ

問二 傍線部①「それぞれの地位には、それにふさわしいと思われるスタイルがある」とありますが、これはどういうことですか。この説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人のふるまい方は、いつの時代においても他者とは関係なく自分の意志によって決定されているということ。

イ 人のふるまい方は、過去にそれぞれの地位ごとに定められ、現在まで引き継がれたものであるということ。

ウ 人のふるまい方は、昔も今も周囲の人々がその人の地位に期待する内容によって決まっているということ。

エ 人のふるまい方は、自分がよく観るテレビドラマや舞台に出ている役者の影響を受けてしまうということ。

問三 傍線部②「生徒らしさを調節しながら行動している」とありますが、これはどういうことですか。この説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のまわりにいる人から見られると、その場だけだれもが優等生と思うような生徒の姿を演じているということ。

イ 自分のまわりにいる人が自分に注目し始めると、さらに他の人よりも目立つような話し方をしているということ。

ウ 自分のまわりにいる人を見て、どうすればありのままの姿でふるまえるか悩みながら行動しているということ。

エ 自分のまわりにいる人によって、生徒としての自分をどれぐらい出すかを考えてふるまっているということ。

問四 にあてはまる語を本文中から二字で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「子どもたちが生徒化する」とありますが、これはどういうことですか。この説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもたちが大人になるまでに大部分の時間を学校で過ごすようになり、まわりが思い描く生徒像がどのようなものであるか理解し、次第にその姿に近づいていくこと。

イ 子どもたちが大人になるまでにさまざまな学校に通って学ぶようになり、その度にそこで期待される姿に正されていく中で、どれが最も正しい姿なのかわからなくなること。

ウ 子どもたちが大人になるまでに長い間学校に行くようになり、毎日のように勉強という「演技」をすることが求められる結果、優秀な人間がたくさん現れること。

エ 子どもたちが大人になるまでに何度も試験を受けるようになり、その結果を学校からも評価されていくうちに、自分の評価に関わることをしか取り組まなくなっていくこと。

問六 傍線部④「どんな生徒であるかが、自分であることの中心を占めるようになるのです」とありますが、これはどういうことですか。二行以内で説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

佳奈（「お姉ちゃん」）は家族で暮らす団地に咲いていたつつじを、いけないとわかりながらつんで遊んでいた。そのつつじを使って、美しい「つつじの道」を長い時間かけて作るが、それを知らずに自転車で佳奈の元にやってきた一つ下の弟の進がひいて壊してしまった。それに怒った佳奈は、泣き叫びながら進を責めて、進が乗っていた新品の自転車を蹴って壊そうとしてしまう。

母は、私がヒステリーをおこしたのを目で見やぶった。わけを説明しなければならず話していくうちに、私はちよつと分が悪いなと思った。

「わざとお姉ちゃんが作ったものをこわしたんじゃないわね。意地悪したんじゃないでしょ？」

母は進に聞いた。進は大きくこつくりとうなずいた。

「お姉ちゃんにあやまったの？」

× がぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

「ごめんなさい、は？」

母にうながされても、進はむつと押し黙っていた。自分が悪くないと思っている時の進はひどくがんで、誰の言うこともきかない。「きれいに咲いているお花を、そんな風にむしっちゃいけないのよ。わかってるわね」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん」

私はしぶしぶ答える。母が進の味方についているのがわかるので、おもしろくない。

「たくさん取ったの？」

「うん」

「どのくらいたくさん？」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあつた。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい」

「そんなに取ったの？」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取つちゃダメ！ お花を取ったりしたらいけないの。さあ、もうしないって約束してちょうだい」

けつきよく、私が怒られたのだった。① これはおもしろくないので、母がいなくなると、私は進をめいっぱいこついた。

「明日の朝までに、お花、もどおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。大きな黒目がちちんで白目ばかりになったように見えた。

その晩は、私が先にお風呂にはいった。進とは同じ部屋を使っているが、彼はまだ、つつじの花を一階の自転車置場に放りっぱなしにしているようだった。蛍光灯がぼやぼや光る夜の自転車置場は、ずいぶんと気味の悪い場所だ。あの薄暗がりの中のつつじの花のかたまりを思い浮かべると、なんだかいい気がしない。進はどうするつもりだろう、と私は考えた。それとも、どうもしないつもりかしら。私はお風呂が好きで、とても長い時間はいつている。スポンジのア

ヒルを湯船にしずめたり、紙せつけんをとかしてみたり、シャンプーのあわで鏡に絵をかいたり、やることはいくらでもあるのだ。進とつつじの花のことはいつのまにか忘れていると、いきなり浴室のドアが開いた。

進だ。その時、私は薄い水色の湯船につかり、あがる前の「百敷え」をやっていた。

「七十七、七十八……なあに？」

いきなり、ふぶきのように、紅色のひらひらがふりかかってきた。一気にぱあつと、私の頭めがけて、濃いピンク、淡いピンク、朱色、薄紫、白のこまかいかけらが落ちてくる。鮮やかな色に飲みこまれて、私は一瞬息ができなくなる。つつじだ。つつじのふぶき。

進は、砂場用のバケツを空にしてしまうといかにも気分よさそうに、にやりとした。私はあつけにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすくって手の平でながめると、つつじはだいぶおおざっぱに引きさかれていた。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気のいる仕事だろう。

ドアのしまる音がして、進は姿を消した。私は、湯船に浮かんだこまかい花びらを、お湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それはとてもきれいだつたが、こわくもあつた。② 花が完全に死んでしまったのがわかるので、こわかったのだ。紅や朱や濃い桃色のかからは、花の血のようだ。進が花を殺してしまったと思い、私は湯船の中でみぶるいした。

A 棟のわき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮かんだ時、私は悪いのは自分であることに気がついた。私がむしりとして、私がすてて、進がつぶして、進が引きさいた。でも、最初は私だ。

自転車が道しるべをひいてしまった時のショックが、あまりに大きかったため、進ひとり花をめちゃくちゃにしたような気持ちでしていた。だから、母が進より私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうちは、つつじが死んでいることがわからなかった。花が、自転車のかごの中の黒いかたまりになった時、かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が花を小さなかけらに変える。血のような花ふぶきにとりまかれた今、私はすっかりおびえてすくんでしまったのだ。

③ 自分がとてもとても残酷な気がした。明るい色の小さな花のかげらが、髪やだやお湯の上や白いタオルの洗い場の床に散っているのを、きれいだなと思い、こわいなと思い、胸がどくどくと鳴って苦しかった。

私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅くしてじっとしていた。湯気が頭につまって、なんだか首がぐらくらするようだった。

「ちよつと、いつまではいっているの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして目をみはった。しかし、母は私よりもっとはっとしたらしく、小

さな悲鳴をあげたのだった。

「何？ 何よ、これ！」

色とりどりの「つつじ風呂」。

私はまだぼんやりとしていて、返事が頭の中に用意できなかった。

母は、湯船に浮かんだつつじのかけらを手ですくいあげた。

「まあ……」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ」

私はやつと声を出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわえた。

④「進がやったのよ」

母はお湯の中をかきまわしていたが、透明なおかしな形のかけらを、いくつか手の平にすくいあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。

〔語注〕※セメダイン……接着剤の一つ。

った。丸めたセロテープと※セメダインのかけらだ。
⑤急にほのぼのとおかしくなった。進の気持ちだが、そっくり理解できた。弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。彼はセロテープとセメダインを使つて、破れた花びらをつなぎあわせようとした。きつと、さんざん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭にきて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。
私はなんだか、ほっとしたように明るい気持ちになって、湯船から、さんぶりとあがつた。
「シャワーを浴びなさい。髪にいっぱいいついてるわよ」
母が命令した。
私はくもった鏡を手でふいて、自分の姿をうつしてみた。ぬれた髪に点々とほりつく、濃いピンクや朱のつつじのかけらは、なかなか悪くないがめだった。

（佐藤多佳子『サマータイム』）

問一 波線部X「かぶりをふる」、Y「目をみはった」の本文における意味として最も適当なものを、次の各群のA～Eのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X「かぶりをふる」

ア 首をかしげて押し黙る
イ 聞こえていないふりをする
ウ 頭を左右にふって否定する
エ うなだれて反省する

Y「目をみはった」

ア 悲しくて目を涙でいっぱいにした
イ 驚いて目を大きくみひらいた
ウ 怒って目を細めてにらんだ
エ 怖くて目をぎゅつとつぶった

問二 傍線部①「これはおもしろくない」とありますが、なぜ「私」はおもしろくないと感じたのですか。その理由として最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 自分が作った花の道しるべを壊した進のことこそ怒るべきなのに、進に意地悪をしないことを母から約束させられたのが嫌だったから。
イ 自分が作った花の道しるべをわざと進は台無しにしたのに、母が進の巧妙な嘘にまんまと騙されていることが悲しかったから。
ウ 自分がヒステリーをおこして進を巻き込んだのに、母が更に進を問い詰めているのを見て、姉としてかわいそうに思ったから。
エ 自分が一生懸命作った花の道しるべを台無しにした進は母に怒られず、花をつんだ自分だけが怒られたことが不満だったから。

問三 傍線部②「花が完全に死んでしまった」とありますが、次に示す本文中のつつじの状態のうち、これを表現しているものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A A棟のわき道に咲きこぼれていたつつじ
イ 美しい道しるべ
ウ 自転車のかごの中の黒いかたまり
エ 血のような花ふぶき

問四 傍線部③「自分がとてもとても残酷な気がした」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 湯船に浮かんだつつじを見たときに、大量の血のようだとこわがりながらも、美しいと思ってしまったから。
イ きれいに咲いていた生きているつつじを大量につみ、花の命を自分が絶ってしまっていたことに気づいたから。
ウ 花をつんだのは自分であるのに、つつじが黒いかたまりと化してしまつたのを見て、罪悪感すら抱かなかつたから。
エ 一度つんでしまった花は二度と元に戻すことはできないとわかっていながら、弟に元に戻せと命令してしまつたから。

問五 傍線部④「進がやったのよ」とありますが、この発言をした時の「私」の気持ちとして最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 進ではなく自分がつつじを風呂に入れたと母に勘違いをされて、また怒られてしまうのは嫌だという気持ち。
イ たくさんのつつじをつんでしまった、という罪悪感にかられていることを母に悟られたくないという気持ち。
ウ 自分がつつじをつんだと母が思う前に、進が犯人であると告げて罪をなすりつけてしまおうという気持ち。
エ 姉である自分が、弟の予期せぬ行動にあっけにとられているところを、母に見られたくないという気持ち。

問六 傍線部⑤「急にほのぼのとおかしくなった」とありますが、この時の「私」の心情を三行以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いま地球の温暖化が最大の カンシンジ になっていますが、気候の変化をいち早く感じるのも ※₁ 里山の暮らしです。

最近、温暖化による影響で動物や植物の ブンブ する範囲が変わってきたというニュースがよく報道されますが、^① 私たちはもう十年以上も前から、気温や生態系の微妙な変化に気づいてきました。

たとえば、私たちが引越してきた頃、山の上には蚊がいまませんでした。

たまに見かけることはありましたが、腕に止まっても刺す元気がないような、弱々しい奴ばかりでした。それまで暮らしていた標高九五〇メートルの軽井沢では蚊の姿を見かけませんでしたから、それより百メートル低い ※₂ ヴィラデストは、彼らが到達できるぎりぎりの高さだったのでしょうか。

ところが、山の上で夏をひとつかふたつ過ぎすうちに、夕涼みをするとかならず蚊に刺されるようになりました。毎年八月には ※₃ 上田の花火大会を庭から眺めるのですが、いまでは腕にも足にもしつかり蚊よけのスプレーをかけ、蚊取り線香を用意しないと外に出られません。

夏の気温も年々高くなっています。昼間は暑くても夜になると涼しい風が吹き、窓を開けて寝ればクーラーがいらないどころか、ときどき寒くなって目が覚め、あわてて窓を閉めるほどだったのに、ここ一、二年は夜まで暑くて寝苦しい日が何回かあります。

寒冷地には ※₄ カマドウマはいてもゴキブリはいないのがふつうでしたが、最近ときどき小さなゴキブリを見かけるようになっていきます。ブドウに関しては、晩霜の危険が以前より少なくなり、 ※₅ 積算温度が高くなってブドウの糖度が上がるなどの好影響と、雨量が多く天候が不順になった悪影響が相殺している感じですが、これからは野菜やハーブにもさまざまな面で温暖化による影響があらわれてくるかもしれません。

里山は、その斜面が数百メートルの標高にわたって自然に晒されていますから、麓のほうからてっぺんに向かう気温の上昇が等高線に沿ってはつきりとわかる、いわば ② 地球温暖化の最前線であるといえるでしょう。

古くから里山の周辺で暮らしている人々には、多くのことを学びます。

このあたりの地域では、ひとつの農家が離れたところに何か所もの土地をもっているのがふつうです。だいたい ※₆ 三百坪（二反歩）単位で、^③ たくさんの方が複数の土地をたがいに入り組んだかたちで所有している。

私たちが最初に譲ってもらった農地は合計三千五百坪でしたが、地主さんは十一人いました。農水省は農地を集約して、ダイキが営農でコストを削減しろ、といいますが、役人言葉で中山間地と呼ばれる里山の斜面は、農地を集約するなど端から無理なところです。

それにしても、もう少しまとめたらどうだろうか。

私たちをはじめはそう思いました。

おそらく長い歴史の中で、なんらかの理由で土地を交換したり、分割したり、さまざまな経緯があつての、意図せざる結果だろうと思つていたのです。

ところが、いろいろ話を聞いていくと、どうもそうではないらしい。

里山の場合、場所が違うということは、標高が違うということにつながります。そうでなくても、山との位置関係で日当たりが違ったり、霜の通る道が違ったり、それぞれの場所によって微妙な差異が生まれるのです。

複数の土地をもっていて、異なる場所の田んぼでコメをつくれれば、その年の気候条件によって収穫に微妙な差が示されるでしょう。去年は上の田んぼが良かったが、今年は下のほうがよくできたとか。あるいは、ひとつの田んぼに病気が出ても、もうひとつのほうは助かった、とか。

見事な ※₇ リスクヘッジ感覚です。

実際には、集落の近くに水田をもち、山の斜面の土地を肥料置き場にし、山林の所有地では椎茸を栽培するなど、目的に応じて複数の土地を利用してケースが多いようですが、もしこの調子で温暖化が進んで、下のほうの田んぼでは夜の気温が下がらないためにコメの出来が悪くなった、などという ゲンシヨウ が生じたとしたら、次の年は上のほうの土地を田んぼにしよう、といった タイサク がとれるのです。

近所の農家やスタッフの実家からもらったり買ったりするのですが、みずみずしい新米のおいしさは格別です。

「おいしかった。今年の新米はとくにおいしいね」

実家で栽培しているコメをくれたスタッフにそういうと、

「私は食べたことはありません」
という。

「今年の新米はまだ食べてないの？」

「いえ、毎年。うちでは新米は食べないんです」

どうして？ あんなにおいしいものを……いま食べなければ、そのうちに古米になってしまわないか。
しかし、地元のお年寄りに聞くと、こういふのです。

「新米ねえ。そういえば、食べたことがねえな。うちじゃあ、いつも三年前のコメを食べてるから」

これを聞いたときは驚愕しました。

いつも三年前の古米を食べている。三年前！

「でも、俺も歳とったし、誰もやらないから、今年から田んぼをやめることにした。これまで他人のつくったコメを食ったことはないが、三年すれば、新米を買って食うようになるかもしれない」

いつ起こるかもしれない飢饉のために、備蓄した古米から食べていく、という発想は、古くは日本の農民全体にあつて、里山に伝わるだけではないのかもしれませんが、とくに山間の土地の場合は標高的にもギリギリの条件の田んぼが多いだけに、いつなんどき不作に見舞われてもいように心していたのでしょうか。が、それが日本の昔話ではなく、いまの現実として生きていることを知ったときは、^④ 本当に驚愕しました。

(玉村豊男『里山ビジネス』)

〔語注〕※1 里山……人里近くにあつて、その土地に住んでいる人々の生活と密接に結びついている山。

※2 ヴィラデスト……長野県にある、筆者が経営する施設の名称。 ※3 上田……長野県上田市のこと。

※4 カマドウマ……バツタの一種。

※5 積算温度……ある期間の日々の平均気温のうち、一定の基準値を超えた分を取り出し合計したもの。農作物の栽培限界などの目安となる。

※6 三百坪……一坪は約三・三平方メートル。 ※7 リスクヘッジ……危険を回避すること。

問一 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a カンシンジ b プンプ c ダイギボ d ゲンショウ e タイサク

問二 傍線部①「私たちはもう十年以上前から、気温や生態系の微妙な変化に気づいてきました」とありますが、筆者が気づいた変化として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 里山では、以前は寒冷地でしかゴキブリを見かけることはなかったのに、最近では標高に関係なく小ささまざまなゴキブリを日常的に見かけるようになった。

イ 里山では、以前は真夏であつても窓を開けて眠れば暑くなく、時には寒くて目を覚ますことさえあつたのに、最近では寝苦しさを感じるほど暑くなることもある。

ウ 里山では、以前は蚊が多く、夕涼みの際には必ずと言って良いほど刺されていたが、最近では腕に止まっても刺す元氣すらないような蚊しか見なくなった。

エ 里山では、以前は雨量や天候が安定しており質の高い農作物を育てることができていたが、最近では雨量の増加や天候の不順によりその質が低下している。

問三 傍線部②「地球温暖化の最前線である」とありますが、これはどういうことですか。この説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 里山は標高差が大きいため気温の変化に気づきやすく、地球温暖化の影響を他の地域に先んじて感じ取ることのできる場所である、ということ。

イ 里山は自然に晒されているため、地球温暖化の影響で自然環境が大きく変化すると、その内誰も住めなくなってしまうことが予想される場所である、ということ。

ウ 里山は新米よりも古米を食べるような習慣が根付いた地域であるため、地球温暖化が進んでも受ける影響が少ないと予想される場所である、ということ。

エ 里山はもともと気温の差が激しいため、昔から地球温暖化への備えができており、他の地域が参考にするところのできる場所である、ということ。

問四 傍線部③「たくさんの人が複数の土地をたがいに入り組んだかたちで所有している」とありますが、これについて筆者が述べていることとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア もともと一人で管理していた土地を、多くの人々が農業を行うために分割、交換した結果、里山の人々は農地を分散して所有している。

イ 里山の文化や歴史を守るため、一方的に合理化を求めてくる役人に抵抗する手段として、里山の人々は農地を分散して所有している。

ウ 多くの種類の農作物を作る場合に、どこで何を作っているのが分かりやすいため、里山の人々は農地を分散して所有している。

エ 農作物が全滅する可能性を少しでも減らしつつ、なるべく多くの農作物を確保するため、里山の人々は農地を分散して所有している。

問五 傍線部④「本当に驚愕しました」とありますが、筆者は何に驚いたのですか。三行以内で説明しなさい。

国語科(中)

国中平
29

解答用紙

受験番号の記入欄は左端にあるので、忘れないこと。

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a					
b					
c					
d					
e					

問一	問二	問三	問四	問五	問六
X					
Y					

問一	問二	問三	問四	問五
a				
b				
c				
d				
e				

受験番号
